

書 評

T.L.ヒース著，平田 寛・菊池俊彦・大沼正則訳，
『復刻版 ギリシア数学史』 共立出版，1998 年

本書は，数学史研究で名高いヒースによる名著“A manual of Greek Mathematics”（Oxford, 1931）の訳書の復刻版である。1959 年に出版された初訳は 2 巻本（共立全書）であったが，これを前半と後半として 1 冊にまとめてある。今回この書が復刻されたことは，数学者や数学史の研究者にとっても，また，数学愛好者や学生にとっても，ギリシアに代表される古代人の叡智へのアプローチを容易にするという意味で意義深いものである。

昨今は教養ブームという風潮のためであろうか，数学史・科学史に関しても様々な書物が見られるが，注意しなければならないのはその書が誰を対象にし，何を目的として著されたものであるかという点である。また，専門書が原典資料の研究に基づいて書かれていることはもちろんであるが，その精神は基本的にはどのような歴史書においても同様である。その意味で，この『ギリシア数学史』は，ヒース自身が「序言」の中で述べているように，原典に対する緻密な研究を広く一般読者向けに書き下ろした書であり，その意図は見事に達成されているという印象を受ける。同時に，ヒースがユークリッド（エウクレイデス）をはじめアリストタルコスやアルキメデス，ディオファントスなどの翻訳に従事していたことが，この書の内容に深さと厚みをもたせていると思われる。おそらく読者は，ギリシア人たちの数学と諸科学，その背景にある哲学的思考の妙味に，驚きと興奮を覚えながら読み進まずにはいられなくなるのではないだろうか。

この書の前半では，ギリシア数学の発端からエウクレイデス（ユークリッド）の『原論』の成立までが紹介され，三大作図不能問題など紀元前 300 年頃までにギリシア人によって研究された数学の諸問題が論じられている。特に注目すべきはプラトンの数理哲学およびアリストテレスの論証科学に関わるもので，命題の証明法やその構造がユークリッド『原論』との関連の中で述べられている。

一方，後半ではアルキメデス以降のアレキサンドリアを中心とする数学者たちの業績が紹介されている。ギリシア数学を語る場合，それは単に“数学”の歴史ではないことはよく知られた通りである。ギリシアなどの古代期においては，自然に対する人間の理解が“数学”の形で現れたものだからである。ヒースもこの点に十分な注意をはらっており，天文学など諸科学と

の関わりを示しながら数学的諸知識の展開を個々の数学者たちの業績を通して論じている。

また、この書には、我々がこれまでよく耳にしたことのある数学的内容が原典とともに示されている。たとえば、パップスの『数学集成』に関する章では、算術平均・幾何平均・調和平均のそれぞれを図示する方法や六角形を形作る八子の巣の等周問題に関する議論が紹介されている。これらはほんの一例に過ぎないが、こうした記述は歴史的エピソードを知るという数学教育的な観点からもからも興味深い。

古代人たちはどのようにして数学を創りだしてきたのであろうか。ヒースの『ギリシア数学史』は、数学者や数学史研究者にとっても、数学愛好者にとっても、この問いに対する何らかの答を与えてくれるという点で一読に値する書であると感じられる。

(平野 葉一, 東海大学文学部文明学科)